

多賀城発で多賀城着。
ヒト・コト・モノを届けます。

アンケート

誌面づくりの参考にしたいと思いますので、
ぜひご協力をお願いします！



- ・自分たちの団体取材してほしい
- ・こんな話題を取り上げてほしい
- ・ユニークな活動や地域のために頑張っている団体・人を知っている

戦後80年から

～話して、聞いて、想って～

太平洋戦争が終わって今年で80年が経ち、あの時代を知る人の声に触れる機会が少なくなりました。「家族や親戚、知人など身近な人から戦争の話を聞くことで、自分事として捉えられるのではないのでしょうか」と話すのは、Conné～こんね～の奥村志都佳さん。長崎で生まれ育った奥村さんは、原爆と戦争の平和教育を受けながらも関心が持てずにいました。宮城で東日本大震災を経験し、「伝えること」の大切さに気づき、「8.9長崎」と「3.11宮城」の経験をつなぎ伝える活動を始めました。

今回、多賀城市在住の方が約80年前に体験した話をご紹介します。3人のエピソードをきっかけに、自分の近くの人と語り合いませんか？



空襲で焼けてしまった中、1枚だけ残った家族写真。
(伊藤セツ子さん)



勉強どころではない時代
鈴木絹子さん
1929(昭和4)年 旧満州生まれ

昭和18年、14歳の時に満州から帰国して京都の女学校に入りました。戦争がひどくなると、勉強どころではなくなり、学徒動員としていろいろな工場で働きました。それまで勉強することができなかったので、終戦後は専攻科に残って学びました。「女が学校に行って何になる」という時代でしたが、母がやりくりをして通わせてくれました。終戦後は父の実家がある仙台に来て、地域の皆さんからも助けていただきました。



落ちていく無数の星は…
渡辺敬治さん
1939(昭和14)年 塩竈市生まれ

塩竈の市場近くに住んでいました。たしか昭和18年頃、夜にサイレンが鳴って外に出ると、真上の空に無数の星が並んだような明かりが見えてバラバラと落ちていきました。防空壕に逃げてわからなかったけれど、いま思えば焼夷弾で仙台辺りに落ちたんじゃないでしょうか。市場は狙われて機銃掃射を受けたこともあり。小学1年生で終戦。父の勤めていた倉庫会社の建物が進駐軍に接收され、米兵が出入りするようになりました。米兵が余った缶詰を岸壁から海に捨てていたのを大人たちが拾って、子どもたちはチョコレートをもらいました。外国人は怖くありませんでした。同じ人間ですからね。



忘れられない空襲の光景
伊藤セツ子さん
1940(昭和15)年 東京都生まれ

5歳のときに父が満州から帰国し、疎開の準備をしていた翌朝に東京大空襲に遭いました。B29が焼夷弾を投下する中を家族で必死に逃げました。上野の山にたどり着いた時に見た、空から真っ赤なワカメがぶら下がっているように炎が燃え盛る光景はいまだに忘れられません。混乱の中、父の実家がある秋田へ疎開し、農家の離れを借りて生活しました。東京とは言葉も暮らしぶりも全く違って驚くことばかりでした。

毎年、戦争の体験を子どもたちに伝える活動をしています。この80年間、戦争がなかったことは喜ぶべきことです。体験談を聞いて思いをはせること、よく考えることが大切だと思います。



◀伊藤さんが描いた家族のイラスト。戦争体験を伝える活動で絵や地図を使って紹介している。

イベント情報

続・またぎきのチカラ ～手渡すタネ～

日時 2025年8月9日(土) 10:45～15:00(10:30開場)

会場 となりのえんがわ(宮城野納豆製造所敷地内)
仙台市宮城野区銀杏町4-29

※入場無料(申し込み不要)

主催/Conné～こんね～(長崎の語り部から学会)



HP



みんなで考える多賀城のこと



地域で支える認知症

認知症とは、脳の病気によって認知機能に障がいが起こり、日常生活に支障をきたす状態のこと。

85歳以上の4人に1人はその症状があると言われ、誰もがなり得る認知症は地域で見守り、支えて行くことが大切です。

地域の“応援者”を養成

認知症当事者やその家族を支援する人の養成を目的に、全国で展開されている「認知症サポーター養成講座」。多賀城市でも2009年度からスタートし、昨年度までに累計215回実施。これまでにのべ5,000人近くが受講し、認知症の基礎知識、当事者への対応や接し方などを学び、認知症への理解を深めています。

当事者家族、知人が軽度の認知症になったという方、自身の将来に認知症の不安がある方など、受講のきっかけはさまざま。受講者からは、「なぜこういう行動を取るのかを考えて、本人の気持ちに寄り添う大切さを知った」「できることを応援する、できないことを支えるというスタンスに共感した」といった感想が聞かれました。

認知症サポーターは何か特別なことをしなくてはいけなくてはいけなく、関心を持つ、気にかける、温かく見守るなどの何気ない配慮が大切です。もちろん、「学んだことを生かしたい」「こういう取り組みがあったらいいな」という想いを活動につなげている人もいます。講座受講後、「自分にできることから始めたい」と感じ、認知症カフェのボランティアに参加している渡邊富士夫さんもその一人。「順番に年老いていくわけだから、支え合いの循環をつなげていければ」と話しています。



↑講師の先生は「認知症への理解が進めば、さまざまな福祉サービスがいらなくなるくらい、認知症の方もそれまでと変わらずに生活できるまちになると思います」と話します。

認知症サポーター養成講座

日時：2025年10月24日(金)
10:00~11:30/18:30~20:00

※当センターの会議室で開催予定。
※以降の予定、申し込み、問い合わせは
多賀城市保健福祉部介護・障害福祉課(TEL:022-368-1498)まで。



↑サポーターの目印、オレンジリングとカード

認知症のイメージを変えるために

認知症当事者、その家族、地域住民、支援者などが気軽に交流することができる場として「認知症カフェ」があります。2024年9月から多賀城市内で認知症サポートカフェ pause- パウゼ- をスタートさせた介護支援専門員・介護福祉士の高橋佳奈さんには、「認知症のネガティブなイメージを変えたい」「認知症の人と、そうでない人の壁を取り除きたい」という想いがあります。パウゼとはドイツ語で休憩のこと。その名の通り、参加者がほっと一息つける場所を目指しています。高橋さんは、認知症の症状がある人の世界観、認知症患者特有の行動への考え方や見方を変えるアドバイス、対応方法などを通して、認知症の理解促進に励んでいます。「どんな小さな不安や疑問でも話してほしい」「お茶飲み感覚で来ていただけると嬉しい」と話してくれました。



たとえ認知症になったとしても、住み慣れたまちで自分らしく安心して暮らしていくためには、地域の理解が必要不可欠です。みなさんもできることを考えてみませんか？

地域ぐるみの支援

高齢者本人や家族にとっても身近な相談窓口となるのが地域包括支援センター。相談に対してじっくり話を聞き、必要な支援、地域の資源につなぐなど、それぞれの状況に応じた対処法を紹介しているほか、地域で認知症カフェを企画・運営しています。中央地区の取り組みのひとつが「傾聴サロン」。共催の「傾聴の会多賀城」には、認知症サポーター養成講座の受講者が多く在籍し、普段から傾聴ボランティアを行っています。

地域で開催している認知症カフェ

- ひだまりカフェ (会場|新田住宅集会所・問合せ|西部地域包括支援センター)
- なかっざいカフェ (会場|個人宅・問合せ|西部地域包括支援センター)
- 傾聴サロン (会場|多賀城市社会福祉協議会・問合せ|中央地域包括支援センター)
- おおしろカフェ (会場|みやぎ生協大代店集会所・問合せ|東部地域包括支援センター)
- 聴くカフェ (会場|鶴ヶ谷住宅集会所・問合せ|東部地域包括支援センター)
- 桜木カフェ (会場|桜木住宅集会所・問合せ|東部地域包括支援センター)
- あいのカフェ (会場|愛の家グループホーム多賀城笠神・問合せ|東部地域包括支援センター)

TEL 西部：022-309-3950 中央：022-368-6350 東部：022-363-4055

認知症ガイドブック

多賀城市が発行している認知症ガイドブック【認知症ケアパス】。認知症カフェや地域活動、医療や介護サービスなど、いつ、どこに、どんな相談先があるのかといった情報から認知症の基礎知識まで、さまざまな情報がまとめられています。



tag

「tag(たっぐ)」には、多賀城(tagajo)の頭文字3文字、みんながタグを組んで地域をつくる、多賀城に新しいタグ(価値)をつける、という意味が込められています。



ホームページ



ブログ